

曲直瀬道三の『鍼灸集要』について

木場由衣登

日本鍼灸研究会

『鍼灸集要』は曲直瀬道三(1505~1594年)による代表的鍼灸書である。京都大学富土川文庫(請求記号:シ・508)と九州大学附属医学図書館(請求記号:シ・324)に二種の写本が一巻ずつ伝わる。京大本は巻末に道務による「于時永禄六年(1563)癸亥歳五月二日於洛下翠竹庵自一溪先師賜之」と奥書があり、これが道三に纏わる医書であることが推定される。また、九大本にはこれより遅い天正八年(1580)の樗庵寿泉による奥書がある。『鍼灸集要』に刊本は無いが、近年では『鍼灸医学典籍大系』(出版科学総合研究所, 1987年)に影印が集録され、『鍼灸医学典籍集成』(オリエント出版社, 1985年)と『曲直瀬道三全集』(オリエント出版社, 1995年)にも再集録される。これほど幾度も刊行されながらも、『鍼灸集要』に対する詳細な考察はないので、以下、愚見を述べたい。

京大本『鍼灸集要』の巻頭には1丁半に渡り要穴や穴位などの纏まりの無い箇条書きがある。そして、次に「雖知苦齋鍼灸集要目録」が3丁半あり、そして本文が置かれる。『鍼灸集要』の本文の前半(京大本で37丁)は、鍼灸の理論、刺法、治法等を記載し、鍼灸の論理と技法が述べられ、特に『鍼灸大全』(1439年)より引く歌賦(十二経納天干歌、八法臨時支干歌、金針賦、席弘賦、靈光賦、標由賦等)に重きが置かれる。他に論子午流注之法(『鍼灸節要』)や諸経之穴数(『十四経発揮』)なども記載量が多い。そして、後半(京大本で10丁)は「諸證の治応穴」として55項の病證に対する鍼灸の治法が集録される。

『鍼灸集要』は、各項目に典拠となった医書を符号として明記するが、これは道三著の『啓迪集』の構成と同様である。量的に前半は『鍼灸大全』(「徐」として46回、「廷瑞」として1回、計47回)から引用が最も多い。次に『鍼灸聚英』(「聚」17回)、『鍼灸節要』(「節」16回)、『資生経』(「資」5回)、『十四経発揮』(「十四」2回)、『医経小学』(「小」2回)、『丹溪心法』(「心」1回)、『奇效良方』(「奇」1回)の順に多く引用される。高武の著作も多く、計33回の引用がある。

後半の治法が記載される病門は、中風、風痲、尸厥、霍乱、瘧、噎膈、欬逆、泄瀉、痢、気、欬嗽、喘證、勞瘵、脇痛、腰痛、脚氣、黄疸、脹滿、水腫、眼目、咽喉口苦、緊唇、牙齒、鼻病、耳病、癩、脱肛、疝氣、吞酸悪心、吐血、便血、五痔、自汗盜汗、積聚諸塊、消渴、心痛、腹痛、淋病、秘結、瘰癧、小水不禁、遺精、喉痺、痿、頭眩、痛風、癩風、自縊、頭風、瘕子、難産、小兒急驚風、小兒癩癩、小兒癖氣、小兒疳瘦の55項である。これらは『医林集要』(「林」35回、「医林」2回、無記1回、計38回)、『全九集』(「全九」13回、「全」13回、計26回)、『雜病治例』(「治例」13回、「雜病治例」1回、計14回)、『寿域神方』(「寿域」9回、「域」3回、計12回)、『玉機微義』(「玉」1回)から構成される。これらの特徴は、記載される主治条文の全てが灸法ということである。また、『全九集』からの引用とされる灸法が、『全九集』の江戸期版本(元和古活字刊本、文政元年刊本)には無く、天正十七年(1589)の道三頭注本(龍谷大学蔵、請求番号:022-526)には記載される。江戸期の『全九集』は刊行に伴い道三が記載していた灸法を削除したとも見える。また『寿域神方』所引の条文も現存する版本(内閣文庫蔵、崇禎元年本)には記載が無いという(明代の医薬書(その1)、『現代東洋医学』13巻1号、1992年)。

『鍼灸集要』の各条文は、道三の古態を残す可能性が高いが、現存する諸版本との比較には注意を要す。今回、『鍼灸集要』に引用される鍼灸の条文は、鍼は理論を重視し、灸は主治による対症療法を主体とするが、金元明代の鍼灸の特徴をよく表している。